
潔い背中

犀華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潔い背中

【Nコード】

N0385P

【作者名】

犀華

【あらすじ】

放課後の教室。笑う彼女と暴く彼。

しとしとと降る雨が何日かぶりに上がったのはほんの一時間程前のこと。まだ幾分湿気を含む秋の空気は、濃厚な金木犀の香りに満たされた。

開け放たれた教室の窓から吹き込んだ風が、薄茶色の猫っ毛な前髪を攫う。ついでにたった今開いたばかりのノートのページをパラパラと好き勝手に捲った。

「ん…」

今まさに書き始めようとしていた右手はシャープペンシルを握ったまま中途半端に止まってしまった。少しムツとしていつもより荒い所作で元のページまで捲った。

気を取り直して、いざ書き始めようとペン先に力を入れた瞬間――

「あれー？ 姫、まだ残ってたんだあ」

耳に届いた聞き覚えのある高い声に思わず手に力が入る。慌てて力を緩めたが時既に遅く、プチンツと音を立てて芯が弾け飛んだ。

「……」

弾けた芯は小さすぎて、どこに行ったのかも分からない。

まっさらだったノートには、黒い痕跡が残った。

それを見つけて思わず眉を潜める。その僅かな痕跡が気になって、

消しゴムで綺麗に消してしまいたいと思う自分は少し潔癖なのだろうか。

小さく息を吐きながらのろのろと顔を上げると、不思議そうな顔をした少女が教室の入り口に立っていた。

聞き覚えがあるはずだ。同じクラスの少女だ。

彼女の佇まいはいつ見ても美しい。まるで背中に一本針金が通っているのではないかと思うくらいピンと伸びている。その背中に流れるのは、髪も瞳も色素が薄い自分とは正反対の腰まである艶やかな黒髪。きつと一度も染めた事がないのだろう。色白の彼女にはとてもよく似合う。

そんな彼女の普段と違う点と言ったら、その手の中にティッシュケース程の大きさの箱がある事くらいだろうか。

「何してるの？」

ぼうつと眺めていたら、いつの間にか彼女は艶やかな黒髪を靡かせながらまっすぐに歩み寄って来ていた。

「…ノート。昨日休んだ分借りたから、写そうと思って」

目の前に来た彼女を見上げる。刹那、ぱちりと視線が合った。黒目がちな彼女の眼をカールした長い睫毛が縁取っている。

「へえ、そっか」

「そう」

「ふん」

「……」

必要最低限の事しか言わない自分に友人たちはよく言葉が足りないと注意したが、彼女だけは一度もその言葉を口にしたことがなか

った。

会話が途切れたら途切れたで、特に居心地悪そうにする訳でもなく。むしろその静寂が好ましいといったように、ぼんやりと自分の隣にいる事さえあるのだ。

「ねえ」

「ん」

「村上先生のお祝い、参加する？」

彼女が小首を傾げると、後を追うように黒髪が揺れる。

「うん」

「じゃあ、五百円お願いします」

目の前に箱が突きだされた。

ティッシュケース大の箱だと思ったら何の事はない、ティッシュケースで作られた簡易募金箱だったようだ。

確かお昼を買ったおつりがあつたはず。と制服のポケットに手を入れて探れば、数枚の小銭が指先に触れる。掴みだしたそれから五百円玉を一枚拾い上げると箱に投げ込んだ。すでにいくらか入っていたのだろう、すぐにチャリンと硬質な音が響いた。

村上先生とは、今年の春にこの高校に赴任してきたばかりの数学教師だ。

百八十センチを超える上背に、寝癖のようなくせ毛の黒髪と少し垂れた目尻。にこにこ穏やかに笑う人柄のせいかすぐに生徒達から慕われるようになった。

その数学教師が、来年の春に結婚するのだそうだ。

高校生の頃から十年の付き合いだとか。実はできちゃった結婚だとか。好き勝手な噂が飛び交っているが、それを聞いた当の本人は

「どうだろうねえ」と、いつもの笑顔でやんわりとかわすだけだった。

「ねえ、何？」

結婚祝い。

（あれ、また言葉が抜けた）

「んー、まだ悩んでるんだよねえ。王道と言えば、やっぱりペアゲラスかなあ」

と思つたら、彼女は慣れたようにその言葉の意味を汲み取って。それが心地よくて、少し頬が緩んだ。

彼女は少し俯き加減になりながら、ひとつふたつと結婚祝い候補を上げていく。時折、顔にかかる髪の毛をうるさそうに白くほつそりとした指先で耳にかけている。口元は綺麗に弧を描いて。嬉しそうにも見える彼女の顔は、尊敬する恩師の慶事に心からの喜んでゐるのだろう。

きつとこの表情を見た誰もがそう思うような『完璧な笑顔』だった。

「もういつその事、ベビー服にしちゃおうか？」

自分の言った事が可笑しいとでも言うように、彼女はころころと笑う。同時についつと上げられた顔。細められた目は一見こちらを見ているようだった。

なのに。だというのに。

いつもは澁刺と輝いているその瞳が、今は深い霧に覆われているかのように曇っていた。

それに、気が付いてしまつて。
急に、腹立たしく思えた――。

ぎゅつと眉を顰めて、口元を引き締めた。

それに気付く様子もないまま、目の前の彼女は変わらず声を弾ませる。

たった数秒前までは、自分の足りなさすぎる言葉の真意を汲み取る彼女をとて心地よい存在だと思っていたのに。

不満？不快？なんと言い表せばいいのだろう。胸の奥からドロリとした黒いものが湧きあがつて、頭天边まで血が上るような。無茶苦茶に心を掻き乱すその感情のまま、剥がしてやりたいと思った。その綺麗過ぎる笑顔を。

「…出来るの」

「え？」

急に挟まれた言葉の意味を今度は測りかねたように、彼女の笑みは中途半端に張り付いた。

その様子が無表情のまま見つめる。

「ねえ、祝福出来るの？」

小首を傾げて彼女の瞳の奥を覗けば、言葉を探すように揺らいでいる。

（知っている。そう、知っているんだ。確かに）

彼女は戸惑ったように訊いてくる。

「何、言っているの？」

「本当に、祝福できると思ってるの？」

（その想いの。その心の。その情熱の）

「あたりまえじゃない」

さらに募るように問えば、今度は怒ったような強張った声が返ってきた。

（行き着く先を）

「…ねえ。悔しいんでしょ」

即座に被せるように問えば、くしゃり、と彼女の顔が歪んだ。正しく『悔しい』と言った表情に。

そうやって彼女は理解するのだ。言葉足らずだと言われる自分の言葉を唯一つも取りこぼす事なく正確に。ただ今この時に限っては、それは彼女を傷つけるものでしかないのだと分かっているから、ごめん、とひとつ心の中に呟きを落とした。

「なんつ、で…っ」

ぐつと堪えるように唇を噛みしめている。

（馬鹿だね。そんなに、噛んだら）

唇に傷が付いてしまふ、と無意識に彼女の口元に手が伸びていた。パチンツと乾いた音が教室に響く。

数秒遅れて、彼女が自分の手を払い除けたのだと気が付いた。弾かれた手はちつとも痛くなくて、うつかり笑いそうになった。

（近所の野良猫の猫パンチの方がよっぽど効く）

「なん、でっつ、あんたは、いつつも…、なんでも分かっているみたいにつ」

怒りの為か、はたまた羞恥の為か、頬を紅潮させた彼女はキツとこちらを睨みつけた。

感情の高ぶりのあまりに潤んだ瞳がキラキラと輝く。そこにはもうさっきまでの曇った、どこか虚ろだった瞳はない。感情も露わに生き生きとしている。

憎しみにも近い強い眼差しに、けれど確かに何かが自分の胸を満たす。自分が好ましいと思うその瞳に映るのはこの瞬間自分ただ一人きりだ。

狂うほどの歓喜に近い、妙に高揚するその思い。

ああ、でも。彼女は勘違いしている。なんでも分かっているのは彼女の方だ。いつだって正確に自分の意を汲み取るのは、彼女の方だ。

訂正の言葉も口に出さずうつかり脳内で否定しているうちに、彼女は頬だけでなく顔全体を真っ赤にして肩を怒らせていた。

「あんたのそういうところ、大っきらい！」

妙にキツパリとした彼女の言葉が、突如鋭く心臓を貫いた。決るような衝撃に、グラリと脳が揺さぶられる。胃の腑が冷えて痙攣するような小さな震えが走って、慌てて両足に力を込めて堪える。油断していたせいもあって彼女の反撃は思いのほか身に堪えた。

（ああ、痛いなあ…）

いつだって彼女の言葉は核弾頭より強力なのだ。その事実を知らないまま彼女は力を振るう。

言葉を発せずにいる自分を置いて、彼女は逃げるようにサツと身を翻した。簡易募金箱をしっかりと抱え、そのまま教室を飛び出して行く。そんな時まで彼女の背筋はピンと伸びていて。

自分の言葉は核弾頭までとはいかなくとも、カッターナイフ位の威力はあったらどうか。そんな考えが浮かんで、思わず暗い喜びを感じてしまう自分は少し頭がおかしいのかもしれない。

「……ああ、忘れてる」

（うつかりしすぎだ）

不意に目を向けた斜め前の彼女の席には、学校指定の黒い鞆が所在なさに置かれたままだった。きっと財布や携帯なんかの貴重品は制服のポケットに入っているのだろうけど。

今頃少しだけ冷静になった彼女は、鞆を忘れた事に気が付いているだろう。そうして、自分のいる教室に戻るのが気まずくて図書室あたりで暇をつぶそうと考えているに違いない。彼女は読書が好きで、暇があればいつまでだって図書室に入り浸るのだ。

「……うん」

逡巡の後、手元のノートを手元と閉じた。

今日はもうノートを写すのをやめて、図書室のコピー機でコピーしてしまおう。

彼女の鞆を手にした自分を見て、彼女はどんな反応をするだろう？ 怒った顔？ 気まずい顔？ 厭そうな顔？ それとも、目も合わせてくれないだろうか。

机の中に残っていた教科書や何やらを鞆に放り込みながら、先程の彼女の言葉を頭の中で反芻した。

—— あんたのそういうところ、大っきらい

（まあ…そうだろうな）

多少潔癖過ぎるくらいがある彼女だから、知った風に心の内を暴かれるのは耐えられない事だろう。知られたくない本音を丁寧に、丁寧に、何重にも包んで心の奥に隠してしまっている彼女だから。

（だけど、本当に残念だね）

彼女と一緒にいると優しい気持ちになれる。彼女は言葉足らずな自分の側にいてくれる唯一の存在。

（意外に意見が合わないらしい…）

「俺は好きだよ」

ぼつりと零れ落ちた言葉は、一人きりの教室の中に思いのほか響いた。

気付いていた。

彼女が想いを向けるその先を。どれだけ本気で思っているのかも。笑顔の下でどれだけ苦しい思いをしているのかも。それでいて、誰よりも好きな人の幸せを思っている事も。

知っていた。

それでも変わらなかったのだ。この心の奥が暖かくなる想い。

（仕方ないだろう？）

好きなんだ。ひたすらに気持ちを隠し、それでも真直ぐに佇んでいる。

その潔い背中が。

（後書き）

涙を隠す君がいとしい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0385p/>

潔い背中

2010年12月25日13時00分発行